

釧路湿原自然再生に係る市民参加・環境教育等の推進方策調査懇談会（第3回） 議事要旨

平成 14 年 12 月 16 日（月）13:00～17:00

釧路地方合同庁舎 5 階 共用会議室

【出席者】

懇談会委員

- ・ 辻井 達一 財団法人 北海道環境財団 理事長
- ・ 有山 忠男 株式会社 ライヴ環境計画
- ・ 高嶋 八千代 北海道教育大学釧路校 講師（非常勤）
- ・ 高橋 忠一 北海道教育大学釧路校 助教授
- ・ 丸山 博子 丸山環境教育事務所 代表

臨時委員

- ・ 竹田 純一 里地ネットワーク 事務局長
- ・ 佐藤 吉人 NPO 法人 釧路湿原やちの会 事務局長
- ・ 日高 哲二 NPO 法人 トラストサルン釧路 理事
- ・ 両角 陽一 釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会 代表幹事
- ・ 瓜田 勝也 NPO 法人 霧多布湿原トラスト 副理事長

環境省

- ・ 東北海道地区自然保護事務所

事務局

- ・ 財団法人 北海道環境財団

● 開会

座長 本日は、5 名の方に話題提供をしていただき、その後討論としたい。

● 話題提供～自然再生、地域づくりと市民参加～ 竹田氏

里地ネットワークは、設立から 5 年を迎えた。

本日は、第一点目として 5 年間に 19 ヶ所で行われてきた自然保全活動について、自然再生がなされたのか、市民参加がなされたのか、その地域に住む農家や住民などの主体性をどのように引き出してきたのか、を中心にお話したい。また、第二点目として 3 年間トキの野生復帰の取り組みとして地域社会づくりをやってきたことをご説明したい。第三点目として、地域住民に地元の自然再生へどのようにかかわってもらおうのかを中心にご説明したい。

参考資料『里地・里山で遊ぼう』を参考に説明

秋田の鳥海山は、戦後ブナがほとんどなくなり、ハゲ山になってしまった。里地ネットワークでは、その地域で合鴨農家の人たちを中心に紙芝居作りを行った。できた紙芝居を公民館で上映し、そこでブナの植林活動を呼びかけた。当初は、合鴨農家と都市の合鴨米の消費者が中心となって活動をしていたが、この紙芝居作りを通じていろいろな企業の方々も関わるようになってきた。

愛知県知多半島では、里山で竹が密林化しており、それを何とかしようという事業を展開した。地域の住民に現状確認をしていただき、竹炭をつくることになった。美浜町周辺の活動は、老人クラブの活動も含め、竹炭の生産活動になった。備長炭を焼く釜も作った。地元学から活動の幅を広げていくことも必要。

島根県の三瓶山では、市民による野焼きをして草原を維持している。それに関わっている人たちで紙芝居をつくり、野焼きをする意味などを伝えている。この会の最後は、国産牛を食べることで三瓶山の草原を維持しようという動きにつながっている。

長野県小菅では、棚田が放棄されるなど山が荒れ放題の状態であった。その集落の方々は、放棄された棚田には、ピオトープなどを作って維持管理をしている。これまでの文化を守るために、長野市内も含め参加者を募集した。しかし、参加にはある程度の技術が必要となるため、技術講習会もあわせて行った。

三重県鈴鹿市では、石組みの技術講習会を行った。場所は、白鳥陵の古墳の近くでその場にあった石組みの講習会を行った。市民参加で行ったものであっても効果が必要なので積極的に重機も使った。

山形県最上町では、地元の人が、地域外の方々の助けを借りて、実際に歩いて調べたことを地元の老人に質問して聞き取り、カードにまとめる作業を行った。昔、生物多様性が豊かだったときと現在を比べて、子どもたち自身が、自然に対してどんなことが出来るかを考える良い材料となる。集落から参加した人の中でテーマを決めてそれについて調べているが、テーマが広いほどいろいろな主体にかかわってくる。

都市地域では一般の方々に、直接的な自然活動への参加を呼びかけるのは大変なので、ケビン・ショート氏などを招き、楽しい話とともに参加の呼びかけをした。

所沢では、その地域で保全活動をやっている人たちがいなければ、監視の目がなくなり不法投棄が行われてしまうという状態を認識してもらった。

自然エネルギー学校では、いろいろな分野の主体と組むことで幅広い効果を生み出せることがわかった。

佐渡のトキの事例では、ピオトープ水田を作るプロジェクトを行った。その作ったピオトープを継続的に維持してくれる主体が必要であったため、40カ所の学校に仕掛け、実際に広がりを見せている。

秋田では、秋田杉の産地で子どもたちと一緒に間伐材の枝を使って楽しいワークショップを行った。保全の効果も含め楽しんでもらうことを重要視した。

トキの野生復帰を目指すプロジェクトについても詳しくお伝えする。まずは、関係地域

の 2500 世帯全部を対象に、楽しくやれるイメージで呼びかけた。「水辺のいきもの調べ」では、小学生に実際に調べてもらって中学生がまとめるという形式でやってもらった。調査シートを 69 小中学校すべてに配って出来るところはやっていただくというスタンスでやった。その中で一番大事な場所の 12 校には、実際にトキの野生復帰のプログラムとしてやってもらったが、その中から餌場づくりやビオトープ水田のプログラムが生まれてきている。

住民に地図やカメラを持って見つめなおしてもらうプログラムでは、地元の人たちだけだと見えない部分も多いことから、地域外の方々にも入っていただき、文化や自然などの違いを浮き彫りにすることにより保全活動を広げていく効果がある。

座長 質問等があれば、伺いたい。

- ・ 日頃から地元の方々との好意的な交流が難しいと感じているが、そのようなことはどのように認識しているか？

竹田氏 基本的には、保全活動を仕掛けるときには、すべて地元主体を心がけている。地元にあっていないと長続きしない。

座長 その地域の素材の発見が必要ということ。もう一つは、住民をもっと地域に接近させるというイメージか？

竹田氏 地域の活性化が、地域再生につながるという考えである。

- ・ いろいろな活動に里地ネットワークが関わるきっかけは？

竹田氏 さまざまなきっかけがある。環境省からや、イオングループなど様々。全国にアンケートをとってニーズを調べ、里地ネットワークで出来るところから取組んでいくパターンもある。

● 事例紹介 1 NPO 法人釧路湿原やちの会 佐藤氏

当会では、修学旅行生の受け入れのほか、解説者の養成、行政の橋渡し役などをやっている。修学旅行への対応として当会においてプログラムを作成して提示するなど、学校とのコーディネートなどを行っている。その他一般旅行エージェントの研修等の受け入れも行っている。

現在の課題は、解説者の不足。当会でも養成は行っている。また、大人数に対応するため、トイレなどの問題も生じている。

ガイドについては、20 人に 1 人のガイドを原則としてやっている。アウトドアだけでなく、雨天時でのプログラムやセミナー形式のプログラムなども用意している。ガイドにあたっては、野生生物を巡る問題なども含めて説明している。

座長 質問等があれば、伺いたい。

- ・ ガイドのなかで自然再生に関わるツアーを行っているのか、それとも全く別のプログラムを提供しているのか、自然再生事業が全体の何割を占めているのか、どのくらいの会

員の中で要望があるのか？

佐藤氏 現在、釧路湿原が、自然再生のモデルとなっていること等をこちらから説明している程度。自然再生事業なるものが、全く学校関係に知らされていないのでそれがどういふものなのかを伝えていくことをこれからのテーマ・課題として伝えていきたい。

- ・ 一度に 1 人がガイドする人数を 20 名と言っていたが、その辺の考え方などを再度お聞きしたい。

佐藤氏 ネイチャーガイドの場合は、1 人のガイドにつき 7 名という説もある。ただし、修学旅行の場合、1 クラス 40 名が通常であり、それに応じたガイドの人数を確保するのは難しいので、やちの会では 20 名にガイド 1 人ということにしている。

- ・ 個人的な感想であるが、普段行き慣れている場所にわざわざガイドをつけて案内してもらうことも楽しいことかもしれない。そういった人たちを掘り起こすことができればよいと思う。

佐藤氏 釧路市民の奥様方に釧路湿原と台所がつながっていることを説明すると興味を持ち、足元にある自然を身近に感じてもらえ、良い材料と思っている。

- ・ 今後、本州から釧路湿原への来訪者は増加する実感はあるか？

佐藤氏 まもなく当会独自の修学旅行資料、体験学習資料ができあがる。当初は、高校生向けの資料として作成したが、中学校や小学校も修学旅行で釧路湿原に入ってきており、今後増えると感じている。私立学校の場合は、旅行エージェントを通して、公立学校は直接のアクセスが多い。アクセスしてくる学校は、非常に目的意識の高い学校が多く、釧路湿原はそのニーズに合致して場所であると考えている。

● 事例紹介 2 NPO 法人トラストサルン釧路 日高氏

活動としては、トラスト運動、森作りの運動、モニタリング活動と大きく分けて 3 つの活動がある。トラストサルン釧路は 1988 年釧路湿原が国立公園となった次の年に設立し、2001 年に NPO 法人を取得。現在、会員は 350 名ほどで釧路管内は 50 名程度。

トラスト 1 号地の借地契約後、会員たちが集まる交流会を実施。会員を中心にミズナラやその他広葉樹を土地にあった種子を使って、苗の育成、植樹を行っている。1997 年以降、湿原の周りの林から積極的にトラスト地とする動きがあり、丘陵地に積極的に植樹を行うことが主な活動となっている。秋には「どんぐり記念日」、春には「私の木植林」と称して、会員以外の方も参加するようになった。現在の課題は、行事の準備にかなりの時間を要するため、春と秋以外の行事以外に開催数を増やすことが出来ない。また、参加者についても行事があるから参加するという意識が働くが、その方々が主体的に動くというところまでは、育っていない。

座長 質問等があれば、伺いたい。

- ・ 植林などの活動が、単発にならないために考えていることや取り組んでいることはあるか？

日高氏 個人的な意見だが、例えば植林をして全体としてこの森をどのように作っていくのかという、中・長期的なビジョンが参加者に十分に伝わり、共通の夢のようなものが持てると良いと思う。また、参加者がゆとりを持って参加できる状況が整っていれば、継続的な参加が引き出せるのではないかと考えている。

- ・ 行事開催に関して、役員の負担が大きいとあったが、役員はどのくらいいるのか？また、行事に参加した人が主催者側として手伝ってもよいということはないのか？

日高氏 理事が 9 人いる。理事による議論により、開催行事が決定する。行事の準備に理事以外の方に入ってもらうことは可能であると考え、理事での合意形成を経ないのが現状である。

● 事例紹介 3 釧路湿原ボランティアレンジャーの会 両角氏

釧路湿原が国立公園となった時期を契機にボランティアを募って観光案内を行ったり、自然を解説するなどして、延べ半年にわたって養成講座を行ってきた。そのメンバーが土台となって活動を続けてきており、現在 50 名の会員がいる。結成以来 15 年が経過しているため、平均年齢が 63.5 歳となっている。

会の主な活動としては、清掃活動（クリーンウォーク）のほか、ガイド活動、歩くスキー、会員のなかの専門家による人材育成の要素も含めた自然解説活動も行っている。

当会は、50 名の会員のうち、半数が常時参加しており、10 年を超える活動実績がある。市民の興味・関心を喚起するということを考えながら活動するという手法も当会では実践しているので、自然再生の部分でも当会としてご協力できる部分があるのではと思っている。

座長 質問等があれば、伺いたい。

- ・ 釧路湿原国立公園連絡協議会からの支援の内容はどうなっているか？ また、今後周辺に NPO が増加していった場合、ボランティアの位置付けはどのようになっていくと考えるか？

両角氏 支援は、資金面の支援であり、毎年 30 万円いただいている。ボランティアについては、それゆえに自由に活動できる部分があり、定年後のひとつの目標や生きがいとして機能していけばと考えており、ボランティアとして存在できるスペースは充分残されていると考えている。

- ・ （コメントとして）今後もキーワードとして、市民参加、自然体験、交流が別々ではなく、交流というものに参加とか体験というものがくっついていくような形が、釧路湿原再生を担っていくものと感じた。

座長 ボランティアレンジャーというものは、各国立公園にあるのか？

環境省 全国の国立公園で 10 年ほど前にパークボランティアという形で参加を求め、応じた方々を中心にそれぞれの地元でボランティアレンジャー協議会ができた。事務所も応援しながら全国各地で活動が行われている。当会は、釧路湿原国立公園連絡協議会から資

金的な支援が行われているが、全国一律の例ではない。

- ・ 現役の教員の参加は難しいか？また、会員以外の教員とボランティアレンジャーのメンバーが、勉強の場や交流の場を持つことはあるか？

ボランティアレンジャーの会・近藤事務局長 教員との交流は難しい。また、現役の教員の応募はほとんどない。その理由として教員のなかに釧路、根室地区で生まれ育ったという方がいないというのがあげられる。個人的には、学校側から総合学習の時間にレクチャーを依頼されたことはあるが、当会としてはなかなか進んでいない。希望としては、教員の方々にもっと参加してほしい。

- 事例紹介 4 NPO 法人霧多布湿原トラスト 瓜田氏

霧多布湿原周辺の 3 分の 1 は、民有地となっていたが、東京から移住してきた方々を中心にトラスト運動を展開してきた。現在は、その団体が発展して NPO 法人化し、マスコミでトラスト活動が報じられたこともあり、会員数は 2104 人を数えている。そのうち町内の会員は、95 人と少なく、できれば 200 人くらいは会員になってもらいたい希望がある。

活動は主に下記の 3 つの事業に分けられる。

- ・ 地域の壊れた自然を再生する活動やそれに必要となる湿原環境や動植物の調査活動。
- ・ 湿原の民有地を買い取るためのナショナルトラスト事業を展開することにより、霧多布湿原を保全する。
- ・ 霧多布湿原のファン作りをする。

地元の方は、地元の良さに気付かないことが多く、域外の人たちとの交流を通じて、その地域の自然や文化、歴史などを再発見していくことを目的とした事業などを重点的に実施している。当トラストでは、修学旅行をホームステイの形で受け入れている。このようなことを通じて地元の人たちが、自分たちの町の自然だけではなく、すべてのものに新しい価値観を見出すことができれば、地元の仲間（会員）も増えてくると思っている。

また、会費は、一人 1000 円であるが、これは多くの方が気軽に湿原の保全に参加できるという金額である、会費収入としては、200 万円程度であるが、各企業などからの寄附や各助成金などがあり、年間の予算は 4000 万円程度である。

湿原の中は、カヌーでも案内をしている。ただし、タンチョウの繁殖期となる 4 月から 6 月中旬までは、湿原内のカヌーを規制している。これは、あくまで自主規制レベルであるが、このような市民参加の場においても一定のルール作りが求められると考える。

休憩

● 議題 1 釧路湿原自然再生への市民参加の可能性とあり方

座長 議題 1 に入る。事務局から説明を求める。

事務局 資料 1 に沿って説明

座長 まずは、どの問題が一番重要なのか、地域、域外からの参加などについてご意見を伺いたい。

環境省 いろいろな主体（市民、農業、企業など）を自然再生事業に巻き込んでいくために重要なポイントをお伺いしたい。

- ・ 地元の参加が少ないということは、自然再生事業が自分たちの周りで行われて良かったという認識がなければ続かない。こういったタイミングでいろいろな主体に関わってもらうかが重要。
- ・ 動機付けやきっかけづくりのひとつとしては、活動団体が市民参加のプログラムを作ることが重要。その支援策として市民税を使うことも一つの方法ではないか？また、総合学習だけではなく、小学校からすべてのカリキュラムとして位置付ける。指導者が活用できる副読本などの充実、地域の人たちに参加してもらうようなエコツアーを推進することによって意識が高まるのではないかと思う。
- ・ 里地ネットワークとして取材した標茶町の 1 A 1 P 運動（一つの地域（Area）に一つの誇り（Pride））をこの自然再生事業と組み合わせて進めていくとよいと思う。地域の専門家が関わることによってスピードがアップし、それほど予算もかからないはずである。
- ・ 何かがきっかけでそこへ行ってみたいというインセンティブが働く。域外からたくさんの人たちがくることを一つの戦力として、地域の人々の関心を引くことも大事ではないか。また、どんな人たちが湿原に興味をもっているのかやどんなきっかけがあったら参加するのかということも一度調べる必要があると思う。霧多布のようなリピーターが多い状況が望むべきところであり、いろいろなことをトータルでコーディネートする主体が必要と思う。
- ・ 標茶町で実践されている地域住民が主体となって地域計画を立てていくという側面には、重要なことがある。自分たちが暮らしていく生活基盤が強固なものになっていくことや外部に対して誇れるものになること、入植者の 2、3 代目の生きがいにもなると思う。

座長 霧多布ファンクラブなどに加入するきっかけは何か？

- ・ 湿原の保全を地主から借りて行うという手法が、当時は比較的ユニークでそれが全国紙に採りあげられ、いろいろな人が来るようになった。どんな人が湿原にどのような関心を持っているかをみる一つのマーケティングになったと思う。
- ・ 本州の方では湿原に対する高い関心があるはずなので P R などは全国規模で行ったほうがよいと思う。また、修学旅行など湿原を訪れた学生が、また来たくなると思うようなことも仕組んでおく必要があると思う。

- ・ エコツアーがどれだけ行われているかや観光客がどれだけ来ているかなどのマーケティングをするとすれば、一体誰がやるのか？

環境省 現在、釧路湿原国立公園のさまざまな利用主体からヒヤリングを行っている。

後ほどまとめて整理したいと思っている。ただし、単発的な試みであり、継続的な調査としては取組んでいない。どのような主体にそういったコーディネートを担当してもらうのかは、全国的にも例がないのでひとつの課題である。

座長 かなり似たような行事が行われているか？

- ・ 市町村、企業、ビジターセンター、博物館などでいろいろな行事が行われている。

座長 資料にあるコーディネーターは、湿原再生においてトータルでコーディネートする主体のことを指しているのか？

事務局 いろいろなニーズを間に入れてまとめて、それぞれのメリットを最大限に引き出していく主体ということである。

- ・ コーディネーターの役割を具体的に、細かく考えていくことが重要である。「仕掛ける」「つなぐ」「企画力」「デザインする」「調整する」「診断する」「そそのかす」というようなさまざまな役割が、盛り込まれていると感じるので懇談会の場においてその意味を統一することが必要である。

座長 次回までにコーディネーターの意味については考えていただきたい。ただし、不明確でもコーディネーターというのは、必要となっている。まさに「そそのかす」役割はあっても良いと考える。

- ・ 議題 2 自然再生を巡る環境教育や市民参加の場のあり方

座長 議題 2 に入る。事務局からの説明を求める。

事務局 資料 2 に沿って説明。

座長 資料 2 の表を元にご意見を伺いたい。

- ・ 機能の上 2 つは PR、3、4 番目はプログラムサービスと考える。しかし、これらのことを動かしていくには組織的にやっていくことが必要であるが、独自に自然再生を目的とした組織があった方がよいと思う。いろいろな活動の団体が結集することが望ましいが、それは非常に難しいことと思う。

環境省 既存施設の状況を説明したい。

参考資料の 1 に沿って説明

座長 野外施設を有しているところの入場数が伸びているが？

環境省 温根内のビジターセンターでは、湿原内の木道でのボランティア活動やガイド活動が盛んであり、それも要因の一つである。

- ・ ボランティアレンジャーの会の主な活動場所は、温根内ビジターセンター、エコミュージアムセンターである。温根内ビジターセンターでは、多くのプログラムを実施して

いるし、また釧路市内からアクセスも良い。会員の活動も温根内に集中している。塘路は釧路市内から遠い、ワイルドライフセンターはPR不足ではないか？

- ・ 例えば、本州の子どもなどを引き寄せるためにマスコミの力（番組を作るなど）を利用することも大切と思う。アクセスも楽しくした方がよい。
- ・ 釧路湿原のエリアが広く、拠点が広がっているので釧路駅前や空港などに拠点ネットワークをサポートする施設があると良い。

座長 「場」はどのようなものを考えているのか？

環境省 大きなものを考えてはいない。機能を改善して既存の施設を利用していきことや再生サイトでの小さな拠点でも良いと考えている。駅周辺での情報発信も大切で環境省だけではできないので自治体と連携していくことも大切と考える。

- ・ 参考資料１では、夏場に入り込み数が多いが冬にも興味深いところがたくさんある。また、コーディネートをする主体ができた場合には、湿原利用の許容量も考えていくべきと思う。

座長 再生事業は環境省だけでなく、開発局などでも行っていることから、省庁を越えたところまで考えるエリアを広げるべきであろう。

- ・ 環境関係以外の施設でも環境省コーナーを設けて、自然再生事業への理解を広げるべきでは？

環境省 そういったことも検討していきたい。また、自然再生のWEBサイトも立ち上げていきたい。情報提供であるが、湿原利用小委員会では環境教育のための資料作りを北海道釧路教育局と共同で行っている。

座長 「場」の運営主体について何かご意見はないか？

座長 なければ、これで懇談会は終了するが、本日話題提供、事例紹介をしていただいた方から何かご意見・感想があれば伺いたい。

- ・ 実際に汗をかいて自然保護に活動することが、良い環境教育につながると思う。
- ・ 再生事業のPRをもっと行うことと公園利用のルール作りなど政策の共同提案をしてはどうか？

環境省 今回の臨時国会で自然再生推進法が成立した。平成15年1月1日から施行となる。いろいろな市民が参加すること、再生サイトを環境教育の場として活用することが盛り込まれている。再生事業のPRとして来年6月にシンポジウムを実施する予定である。

以上